

空き家活用の

手前にあるリアル

「空き家活用は、まち協の大きなテーマでもあるんですね。今もどんどん街は衰退していつしまうので、店舗に限ったことではないんですが、新しい人を街に呼ぶ意味でもなんかできないかなあと考えてて、実際、幾つかの事業もやってはきたんですけど…」

「なかなか続かないですね。佳子さんは、こういうのだったら気が楽だなとか、家を活用して欲しいかもというはあるんでしょうか？」

「そうですね……（しばらく、沈黙があつて）私の中ではまだとにかく仏壇があるから、それをどうにかしないと使ってもらうにも使ってもらえないよねっていう…。まず片付けなきゃっていう方が先っていうか：だから、何かで使ってもらえるならいいんです。別にああしてほしいとかは全然何もなくてって感じですかねえ。」

私」とで恐縮だが、妻の実家の片付けを手伝ったときのことを思い出した。「まずは片付けなくちゃ！」。言葉にすればそれだけのこと。しかし、「それだけのこと」がどれほど大変だったか…。特に、自分の生まれ育った実家の片付けとなれば、なおさらのこと。佳子さんの心情的やご主人の気持ちがよくわかる気がした。

今まで、私たちは、空き家活用をまちづくりの課題解決としてとらえてきた。リノベーションが、街に新たな価値をもたらすことは間違いのないかもしれない。しかし、佳子さんのお話を聞いてみると、もっとその手前の話が、かなりリアルが膨大にあるんだという当たり前のことに気付かされる。そして、それはまちづくりを仕事にする私たちにとっても、大切にするべき事柄のように感じられた。

その後も高橋ご夫妻とは、様々な話題で盛り上がった。近年、改定されたという空き家に関する法律（※2023年12月施行の「空家等対策の推進に関する特別措置法」）では、その定義に該当すると固定資産税が最大6倍になるんだとか。そうなる、そう「空き家」にはできないのが心情。週1回の掃除や仏壇のお世話もあつて、ガスは止めても水道と電気はそのまま繋いであるそう。また、懐かしい写真なんかを見つけると、思い出に浸ってしまつて、片付けがなかなか進まないとか。それなら懐かしの写真展でも開いて街のみんなに見てもらおう。みんなで楽しみながらシェアするのがいよいよね…とか、そんな取り止めもないアイデア、あるいは愚痴やらが入り混じる雑談の時間が流れた。その最後に、佳子さんと交わした会話も印象的だった。

「なんか今日、私がここに来ようと思っ

たのが、何かきっかけがないと自分自身が行動できなれないと思つて結局、いつも自分の中ではくすぶつて何とかしなきゃしなきゃと思うけど、何かしないと何にも変わらないと思つて、今日ここで話してみた方がいいのかもしれないのがちょっとあつて…そうなんです」

「今日は大西さんが、ご主人にお声かけして？」

「そうだね」

「あれは、何年か前に私が学区の会合で空き家事業の宣伝をさせていたときに、近くにいた高橋さんが「うちも空き家がね」と叫かれて、それで今回お声かけしたんですね。あれ、これ話して良かったですか？」

「ふふふ、そうでしたね」

「わたし、なんかねさかさま不動産」のこともずっと気になってて」

「え！さかさま不動産、知ってるん

Column

店主の記憶、街の景色 episode 2

坂本屋 | 稲垣一浩さん

40年ほど前、稲垣さんが父親から継いだお好み焼き店

「店の前が行き止まりだったんだわ。（店の中から外を眺めながら）ここが路地になってて、ちっさい居酒屋みたいなのがいっぱいあつて、そこのお婆さんに可愛がってもらつたの。当時うちはアイて、スクランディー屋をやつとてさ。作つとる工場だったの。映画館とかキャバレーとか、この辺りにある店の配達についてつとったんだわ。親は商売やつとるもんで、子どもはほかれればなし。この辺の商売人の子らはみんなそうだったよ。で、ここの行き止まりと思うよ。ドンツキなんて商売にならなかつたんじゃない？」

ですか？」

「確か、まち協さんのチラシで見て」「わあ、それは嬉しいなあ」

「空き家のことで、なんというかちょっと触れてはいけないトピックのようないところありますよね」

「え、そうなんですか？でも、私は今日ここで聞いてもらつて楽になりました(笑)」

「一人ですつと：周りや主人に話したりはしてたけど、結局抱えてるのは私なんで、これをどうしたらいいんだっていうのがずっと自分の中にあつて、今日だからこうやって話せたのは自分の中ですこいなくて。これから何か少しずつ進めていけたらなっていう気持ちになりました。自分だけじゃ何もできないですから、こうして話を聞いてもらつたり、何か意見を聞いたりますと動けそうな気がしてきました。私は、たぶん話したい性格なんで、どんな喋りやう、こんな話でよかったんですかね？」

翌週の木曜日の夕方、大西さんからLINEが入る。街の人とのヒアリングのアポが取れたので、急で申し訳ないが、明日の金曜日に取材に入ってもらえないかとのこと。オンラインでも構わないと書き添えられていたが、スケジュールを確認すると翌日の18時半過ぎなら港まちに立ち寄れなこともない。高橋ご夫妻のインタビューから、ちょうど1週間後。急だったこともあり、食事は挟まないで通常の

インタビューとなった。翌日は大学の仕事も立て込んでおり、港まちに到着したのは予定時間の直前だった。足早にビルに向かいながら、盆踊りの練習に向かう人たちとすれ違う。街に漂う静かな活気は、翌週の「みなと祭」の到来を告げていた。ビルには、すでに宇佐美真さんがお待ちで、久しぶりのご挨拶を交わした。そこで、ようやく頭の中のぼんやりとした記憶が鮮明になり始める。「その節はどうも！もうすぐ祭ですね」。

宇佐美さんは、少し緊張した様子だが、その様子からは誠実な人柄が垣間見える。

4階の事務所に向かうエレベーターに乗ると「懐かしいですね。こんなに狭かったかな」と宇佐美さん。このポットラックビルは、街の人々からは「京屋さん」と呼ばれる。それはこのビルがリノベーションされる前のミニデパートだったころの名前。京屋は、当時大変賑わった街の文房具屋で、初めてのCDや学生服は京屋さんで購入したという思い出を聞かせてくれる人は数多い。宇佐美さんもその一人なのだろう。宇佐美さんのご実家は、このポットラックビルがある築地口商店街に2軒あった「登久屋」という靴専門店。宇佐美さんへのヒアリングは、その懐かしき港まちの面影を振り返りながら始まった。まち協スタッフは、大西さんとピンさん、それに私も加わつて3人が参加した。

懐かしき港まちの風景の断片

「僕が小学生ぐらい、だから1980年から1986年の間は、登久屋でたまに半額セールつてのをやつて、とんでもなかったですよ。学校から帰つてくると、人をかき分けてかないと入れなくて：はい」

「やば！百貨店とかデパートみたいですね(笑)」

「今、このビルの1階で京屋さんの開店当時の写真を飾ってるんですけど、お客さんの行列が商店街にまではみ出てますもんね。アドバリンが飛んで：。賑やかだったでしょうね」

「うちのアルバムにも、京屋さんの階段にヒーローが飾つてあるようなのありました！」

「懐かしき港まちですね。僕がまち協に入つたのは2008年でしただけど、その頃まだ登久屋さんのお父さんが、交差点の角地に立つ電信柱のあたりに立つて、2軒のお店を一人で店番してましたよね。その姿は、なんだか探偵の張り込みみたいで、びっくりしたのをよく覚えてますよ。その頃からすでに商店街の衰退は課題でしたが、それからもう17年、月日が経つのは本当に早いですね」

宇佐美さんは、旧店舗2軒のうちのひとつの建物に今もお住まいで、別棟の空き店舗オーナーでもある。その空き店舗は、商店街の倉庫としても使われているが、一時期は宇佐美さん

Column

店主の記憶、街の景色 episode 3

きつさ姉妹 | 藤井裕子さん

60年ほど前、藤井さんが開店し妹と切り盛りしてきた

「港湾で働く女性もたくさんいました。お針子さん…針屋さんって言ったかな。“麦を入れた麻袋の口をババパッと針で縫う仕事をしてる”って、そういう風にうちの店に来るおばさんたちから聞いてました。女性も男性なりに収入を得ていたから、15時には仕事を終えて、うちでお茶をして、築地の公設市場で買い物をして帰ってましたよ。お茶して、そこのパチンコ屋に行く女性もたくさんいてね、パチンコ屋まで“仕事の人が呼びに来てるよ”って追いかけていったことも何度もありますよ」

のお姉さんから、その活用について相談をまち協で受けていたという経緯もあった。

「はい、施設にいた母の体調が悪かったこともあつて、こちらに来る機会も多かったから…。今は、その母も亡くなったんで、近くにいる僕が主に：はい」

宇佐美さんは、決して口数は多くないが、とても真剣に話を聞いてくれる。そして、どうやら自分にとっても愛着のある商店街の衰退を憂う気持ちもあるようだ。

いつまでがいつ？

探り探りではあるが、大西さんとピンさんからのブリーフィングにも、だんだんと熱が入つていくのを感じる。「単に空き家と思うので、まずはそれをお聞きしながら、この街の増えていく空き家のことを考えたり、どうしたら地域の人が楽しめるような活用ができるかというのを考えていきたい。宇佐美さんには、地域の空き家を持っている方としてお話を聞かせていただきたいです」

「空き家というのは、なかなか触れづらいトピックというか、例えば今回のような取材となると、個人が特定できちゃうのはNGだとか、じゃあイラストで対応しましょつていうのが割と一般的で：」

「ただ、みなさん取材そのものにはとても協力的というか、やっぱりみんな何とかなしたいとか、話してみたい聞いてみたいとは思っているんじゃないでしょうか。宇佐美さんにも率直に聞いてみたいなと思つています。どうでしょうか？」

まち協がこれまでに取り組んできた空き家事業や関連する新聞記事も提示しながら、ひとしきり説明をして、宇佐美さんの反応を待ったが、しばらく沈黙が続いた、ムムム。

「まち協がやって

空き家に街の記憶…残す意味ってなんだろう？林浩一郎センセイに聞きました。

書き手・大西(港まちづくり協議会)

いる空き家のトークイベントとか、お見えになったことはありました？」

「：あのー。あれ、あべこべ不動産でしたっけ？」

「……？」

「もしかしてさかさま不動産のことですか？」

「あ、さかさま不動産、それです！」

「近い近い(笑)」

真剣な面持ちの宇佐美さんの思わぬ言い間違いに、「一気に場が和む。聞けば、宇佐美さんは、さかさま不動産の空き家事業企画だけでなく、他にも行われてきたまち協のイベントに何度か顔を出してくれていたそう。その感想を聞いてみると、賑やかなのは好きだし、街の活性化に通じる空き家の活用についても、いろいろ勉強になったのだという。しかし、では、具体的にどうしたらいいのかというのがわからずにも一歩が踏み出せなかったのだという。

そこで、私はまち協が名古屋市と名古屋まちづくり公社と協働で取り組もうとしているサプリースのアイデアを持ちかけてみた。正直、かなり恐る恐るではあった。私たちの誰もが、今日はそこまで話が進むとも思つていなかったからだ。でも、それを察知したピンさんが、今度は事業のパンフをすつと差し出してくれた。そこには、空き家を活用した事業の仕組みがわかりやすく描かれていて、空き家物件のオーナーが誰を頼ればいいのか、どんな役割を果たせるのか、シンブルに図式化されていた(裏面ページモデル参照)。宇佐美さんは、それを見ながら、私たちの説明をジッと聞いてくれた。

「どう思いますか？」

大事な気がしています。僕が名古屋駅西地区の人たちに「駅裏の記憶や風景を取り戻したいんです」みたいなことを口走ったことがあつて、そしたら「そんなノスタルジーを言われちゃ困る！」って指摘されました。僕はたじろいじゃったんですけど、そこから考えたんですね、過去を振り返ることって何の意味があるんだろうって。過去を振り返ることで未来に何が繋がるかまでちゃんと説得力をもって言わなければ、ノスタルジーで終わっちゃうんだなって。

街の人の話を残しておかなければという切迫感はあるものの自己満足なのか？林先生の経験が私にもグサリと刺さります。一方で、痕跡と記憶と意志の連なりを循環させるという話は、私たちが街の話を聞いていく活動を後押ししてくれるように感じました。

「街の過去が今を介して未来へつながっていくのは、きつとどこの街でも一緒ですね。それがその街の集合的記憶や文化になっていくのだろうし、空き家のこととが街を作り変える上ですごく大事なポイントなんだと思います」。

空き家事業が進んでいくと港まちの痕跡や記憶を意識する場面が増えるでしょう。そうして集めてきた街の過去をやつてくる人に伝え、その人が街の未来に加わるという新しい循環を想像しました。林先生、またもやもやを聞いてください！

「いいと思います！(即答)」

「え？ホント？」

「ちゃんとした公的機関が間に入つてもらえるなら安心ですし：はい」

「マジすか？」

「瞬間、呆氣にとられてしまった。しかし、ことが動く時というのはそんなものなのかもしれない。空き家・空き店舗の活用というテーマは、まち協が誕生して以来続いてきた中心課題でもあった。一時期は、アートギャラリーなど、複数の空き店舗を活用した展開も行つてきたが、街の衰退はそれをはるかに超えるスピードで進んでおり、せつかくリノベーションした物件も、駐車場に変わつてしまった。個人の資産である物件を、公的なまちづくりに活用し、しかもそれを持続可能なまちづくりにつなげていくのは至難のわざなのだ。しかし、その難しさに向き合い続けてきた中で、いつの間にか私たちは、無意識のうちに空き家事業に対して「取扱い注意」「センシティブな問題」というレッテルを貼つてしまつていたのかもしれない。一連の取材の中で、自分たちの思考や行動を束縛するしがらみのようなものに気付けたことは大きな収穫だった。



今回のインタビューでは、長い間続けてきたことが伏線となつて、新たな成果に結びつきそうな手応えも感じられた。しかしながら空き家事業の本格的な展開はまだまだこれから。引き続き、街の人のいろんな話を聞き書き、みなさんと一緒に考えていきたい。



林 浩一郎／1980年東京都生まれ。名古屋市立大学人文社会学部准教授。主な論文に、「名古屋駅裏のまなざし——戦後闇市の創造的破壊」『日本都市社会学会年報』41などがある。

取材・文：小田ビニシウス（港まちづくり協議会）

ファッションから紐解くパーソナリティ

クローゼットを開けたなら。

OPEN THE CLOSET!

港まちで見つけた味のあるお洒落人のクローゼットを漁りながら、そのものの背景や当時の思い出を聞き、今の自分をつくりあげたものが何かを探していきます。



入木太致さん
インハウスデザイナー

港まち在住。友人とともに「Half Times Supply」というクリエイティブチームをつくり、表現活動を行う。過去には「GOOD BOIL」という地域の特色を生かしたマーケットイベントを開催。

デザインからイベント企画、DJやカフェの広報など多岐にわたる活動をしている入木くん。いつもラフでいてどこか遊び心を感じさせるスタイルが印象的な彼のクローゼットを漁りたいと思います！実家だっというから子ども時代のものがたくさんあるのかな、と思っていたけどお洒落な部屋ですね！「自分自身、引っ越しが多くて学生時代は東京に住んでたり、その度に断捨離していて、落ち着いた感じですね〜。部屋はだいぶDIYしていて、まちで太鼓を叩いている友達に棚は手伝ってもらいました!」。入木くんは友人を通して地域のビッグイベントである『みなと祭』にも参加したことがあるそう。服を買うときのポイントってありますか？「基本的には直感！これ良いなと思って手に取って、合わせてみるとすぐ買っちゃう」。でも、それだと点でのお買い物になっちゃってコーディネートが難しくありませんか？「そうなんです！しかも買ったの良いけど大切すぎて着れないこともたくさんあります（笑）」。えーっ!? 僕なんて買ったら着て帰ることもありますよ!? でも確かにタグついたままの服もチラホラありますね（笑）。「そのときの気分でスタメンがあるんですけど、スタメンがスタメンすぎて逆に大切なあまり万年補欠みたいなのもあります…」!。お！せっかくなら今回はスタメンじゃないメンバーでコーディネートを組んでみましょうか！直感と言いつつも入木くんの選んだ服には統一感があり、ジャケットよりはブルゾン、シャツよりはスウェットが多いなど、ただの好きだけじゃない、潜在的な経験と知識に裏打ちされた確かなコレクターボックスのようなクローゼットでした。



セットアップで買ったデニムパンツは色落ちするくらい履いてるのに、このデニムジャケットは一切着ていないとか。一年中着れる素材って、つまり夏は暑い冬は寒い！単体でカバーできるものじゃないからこそ意外と着られる時期短いですよね。



靴もたくさんあったが今回は緑色のVANSを。特にオーセンティックはブランドを代表するモデルで、カジュアルなキャンパス地ではあるが削ぎ落とされたデザインは何にでも合わせやすい!



大切な時に使おうと思って窓際にかけていたら色褪せてしまった黒のツナギ。陽の光で服の色が抜けることを知ったそう。



服だけでなく趣味が見えるライフスタイルグッズもたくさん!



まだまだ出てくるTシャツの数々、たくさん着た服でもコレクションしていくスタイル!



Half Times Supplyで作ってきた歴代のグッズ。デザインからどの時代に作ったかが想像できるのが面白いですね!



かわら版

抜粋編

まちの壁新聞のようなスタンスで港まちの日常的な出来事を取り上げ、毎月ゆるやかに発行している「ポットラック新聞かわら版」。港まちづくり協議会が活動している名古屋市港区西築地学区でしか手に入らない超地域密着型のフリーペーパーです。たくさんの記事の中から記事を抜粋してご紹介します。

かわら版58号より

港まち絵日記

民謡 初心者 奮闘記 -vol.1-

動きの意味を知る

日中は相変わらず暑いものの、夜は多少過ごしやすくなった9月の半ば。私は民謡を教えている教室に飛び込みました。民謡の知識はほぼゼロ。それでもこの世界に触れたかった理由は「浴衣で踊るのが好きだから」という至極単純なもの。単調な動きに思わぬがちです。が、案外ターンが早かったり、足の運びが複雑だったり、HIPHOPやストリートダンスとはまた違う難しさがあると思います。

文・朔千代

かわら版67号より

こども食堂と親心

夏休みに入って、部屋で宿題をやらずにいつまでもゴロゴロしている娘に向かって「あれやれ」「これやれ」といついこうるさくなってしまう。「親の心子知らず」なんて言葉があるように、どうしても思いが伝わらないかと思うけれど、自分も子ども達と一緒に遊ぶことで、自分も子ども達と一緒に成長できるんじゃないかなと思う。思えば、DNAならば仕方ないかと思う今日の頃、先日、これまで気になっていたみなとまちこども食堂へ家族みんなで行って、メニューをいじらなくていい。食事を提供するだけでなく、コミュニケーションを結ぶことで、子ども達にとって安全で愛情に満ちた空間を提供している。自分が入っていた時も、子ども達がご飯を食べ終えて、これから公園で遊ぶんだと言って楽しそうに話していたのを見て、微笑ましかった。そして、何よりボランティアのみなさんが明るくて居心地がすくなく良かった。また、機会があれば小倉トーストをいじらなくていいと思う。親には親の苦労があるけれど、子どもには子どもなりの苦労がある。こども食堂という貧困や孤食という言葉が先に思い浮かぶが、子ども達にはこども食堂で親の愚痴を聞いてもらったり、友達とのコミュニケーションの場として気軽に利用して欲しいと思。ただ、ボランティアのみなさんからも夏の宿題は早くやるよう言ってもらえることが嬉しい。

文・あだつあん

かわら版68号より

みなと祭でパイロンになった話

7月17日、私はお祭りの山車の前で提灯を持っていた。みなと祭において神頭町の山車を先導する大役を任せられたのだ。提灯は3〜4m程の竿の先に括りつけられ、さほど重くない。竿を支える腰巻を着ければ片手でも持つことができる。先導すると言っても、全体の動きを指揮する人が側にいるのでそれに従えば良いのだ。各町内の山車は築地神社を経て、ガーデンふ頭の広場を目指して練り歩く。路地を抜け、大通りの往来に出た時、数万人の観客がこちらを注目していた。その中を歩くという非日常体験は私の気分を高揚させた。自然と背筋を伸ばし、神妙な顔つきで提灯を持ち歩く自分がいた。夢中で歩いていたら、広場に着いた。その後、広場の真ん中で各町内の提灯持ちは円になって等間隔に並び、ひたすら提灯を持ち続けるという任務があった。その円に沿って各町内の山車の舞や踊りが行われた。心の中で「わしや、パイロンか?」とツツコミつつ、炎天下にただ満身創痍で立っていた。

文・空洞で須藤

ユーマの中に責任感にもじむ一文。みなと祭のすべての役割が欠かせないことを感じさせます。

みなとアレコレ

●名古屋港を舞台にした夏の祭り「名古屋みなと祭」は、屋台や花火もちろんな魅力ですが、地域の方々にとっては何よりも盆踊りや太鼓が主役!各町内が太鼓を叩きながら盆踊りを楽しみます。●そんな地域に根ざしたお祭りの一面を、もっと外の人の知ってほしい!ということ、地域の方が先生となってお祭りの歴史や魅力について学んで踊るイベントを大ナゴヤ大学さんと共同開催したり、お祭りで盛り上がる人々の様子を切り取った動画の作成をしたり、外からの参加を促す工夫も進めています。動画はInstagramからご覧くだい!●みなと祭でもにぎやかな大通りです。毎月第2土曜開催のマーケット「みなと土曜市」は歩道エリアにマーケットを展開し、地域の日常に寄り添い交流やコミュニケーションの活性化を目指しています。この土曜市については、本紙前号でも取り上げて、土曜市を支える方々との意見交換の様子をそのまゝ「掲載しました」●その後、地域への認知を高めるべく「のぼり」を作成してみたり、地域団体の出店を応援する「チームみなと」の取り組みも強化しています。意見交換会に参加された方の中には今後もアイデアを持ってきてくれたり、新しい人を紹介してくれたりと、自分ごととして積極的にマーケットについて関わってくれるようになった方もいて、会を実施した意味があったなと感じます。これからも地域内外をますます巻き込む「みなと土曜市」を進化していきます!

まじ協insta

「溝口さん」のあそ1日。

取材・文・写真：西村隆登（港まちづくり協議会）

6月21日夏至 みなとまちこども食堂の日



溝口 由美恵さん（59）

4人の子どもの育てながら、PTA活動を通じて学校行事や、保護者、子どもの活動を支えてきた。その延長で、民生委員・児童委員としても地域に関わり、気づけば20年近く。地域の輪の中心的な存在として、自然と人をつなぐつつ、その関係性を生かしてこども食堂の運営にも尽力中。



7:30 おはようございます！

毎朝4時起き、この日も朝から軽快な動き。お気に入りの赤いパンツで地域内の移動は白の自転車です。手にはそうめんつゆ用の水がキラリ。



8:00 朝の仕入れ

柳橋中央市場へ。「お惣菜の玉三屋」さんで副菜の惣菜を大量に仕入れます。バラエティ豊かな惣菜からこれぞという品を選ぶ。



9:00 100人分のからあげを

朝からコミュニティセンターのキッチンは大忙し。オープンにむけて地域のお母さん達がお揃いのエプロンを身にまとい、腕を振ります。



12:30 お屋の一コマ

地域の方々と会話。こども食堂のあと、近くの喫茶店でさらにしゃべりなんてこともあるそうです。



13:40 遅めの昼ごはんはと振り返り

ようやく一段落。今日一日を振り返りつつ、「最近どうなの？」という会話が自然と始まります。この時間もこども食堂の運営のために必要な時間です。



10:00 こども食堂 OPEN

こども食堂の運営は、溝口さんが地域の方々と顔見知りになるきっかけにもなっているそう。顔見知りから、相談できる人へ。素敵な流れです。



15:50 1日お疲れ様でした！

今日もがんばった～、の顔。午後は休憩！スーパー銭湯に行くかも、とお家へ帰っていく溝口さん。まだまだ元気に見えました。



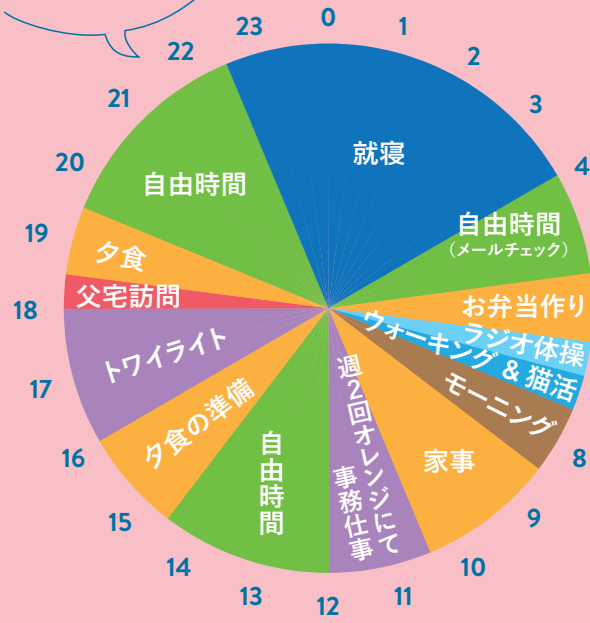
20:00 夜の楽しみ「美楽」で晩酌

夜、連絡があり港まちの居酒屋「美楽」へ。常連の友人と晩酌中の溝口さん。いつもの生ビールと、今日のアテはウニ。夜のお供はもっぱらビールだそう。

コロナ禍を越えて生まれたこども食堂は、こども以外もつなぐ場になっている。

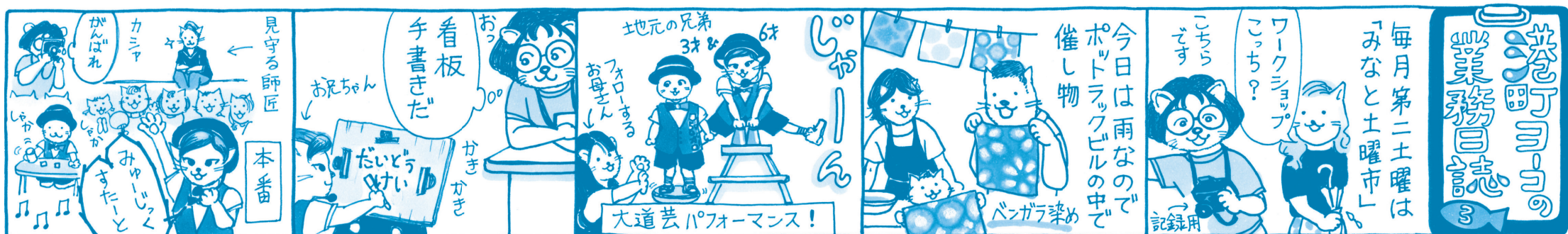
この企画も、今回で3回目を迎えました。筆者はどうやら、「年の離れた世代の方々が、これまで紡いできた日々の積み重ねのうに築いている現在の活動」に強く惹かれてしまうようです。今回は、溝口さんへの取材を通じて、「みなとまちこども食堂」の1日にも密着することになりました。コロナウイルスが社会を大きく揺るがし、あらゆる活動が制限された2019年。その後、2022年ごろから「ウィズコロナ」という言葉が広がり始めました。同時に、「孤食」や「孤独」といった課題にも注目が集まり、その解決策のひとつとして、「みなとまちこども食堂」は手探りの中から立ち上がったのだそうです。西築地地区は、65歳以上の高齢者が人口の3人に1人を占める（高齢化率31.9％／2024年9月30日時点・名古屋市地区防災カルテより）地域です。そのため、このこども食堂には、家族連れだけでなく地域の高齢者も多く訪れます。こどもたちと高齢者が、同じ机を囲み、同じ空間で食事をし、満ち足りた表情で帰っていく——そんな光景が日常の一部になっているのです。配膳をしながら来場者一人ひとりに声をかけていく溝口さんの姿が特に印象的でした。そこには、彼女がめざす「コミュニケーション」の形が表れているように感じました。コロナ禍で分断された社会的なつながりを、食べること、話すこと、場を共有することによって再び紡いでいく。この地区のこども食堂ならではの光景の中に、溝口さんが長年培ってきた「人とつながる力」の真髄を見た気がします。

溝口さんの日常



※みなとまちこども食堂……西築地コミュニティセンター（いわゆる公民館）でみなとまちこども食堂ボランティアグループが運営するこども食堂。こどもが一人でも安心して来られる、食事ができる場所として毎月第1・第3土曜日の10時～12時に開催。中学生以下無料、高校生以上は200円。

【港町ヨコ】港まちポットラックビルの受付を担当する、架空の港まちづくり協議会スタッフ、ちとねこ背。



マンガ：宇佐江みつこ…名古屋市在住の漫画家・イラストレーター。岐阜県美術館のSNSで4コマ漫画『ミュージアムの女』を連載中。

港まちという舞台で、少しずつ交差していく

「観光地みたいって、最初は思ったんです」と話すのは、港まちに暮らす山口さん。旅館や喫茶店が並ぶ町並みに、引越してきた当初は「旅行しているみたい」と感じたそう。けれど今では町内会にも参加し、ごく自然にまちとつながる暮らしを送っている。そんな山口さんが使っているスタジオは、もともと喫茶店だった建物。普段から扉を開けていると、近所の人が様子を見に訪れ、声をかけてくれるという。「だんだん“人が集まる場所”にもなるかもしれないと思って」。その思いに応えるように、建築家の河部さんがスタジオの改修を手がけた。展示やワークショップにも対応できるよう、机や椅子を動かしてレイアウトを変えられる設計に。「育ったのは町工場の多い別の港エリアだけど、ここは歴史があって、人との距離も近い。文化が根付いていて、よそ者でも入りやすい懐の深さがあります」と河部さんは話す。一方の間宮さんは、この日のために、先日家族で訪れた長野県で初おやきを我慢したそう。「誘惑に負けずに今日のために食べなかった!」とどんな具材が合うか真剣に考えるなど、真面目な一面を見せてくれた。そんな彼が港まちに関わるようになったのは、アッセンブリッジ・ナゴヤのプロジェクトとして運営されている港まちの社交場「NUCO」でYouTube撮影をしたのがきっかけ。運営をしていた山口さんと出会い、「面白そうなのがいっぱいいて、気づいたら好きになってました」と語る。具材選びのバランス感覚から始まり、気遣い上手な3人が集まった第3回のおやきは、具材もやさしさも包まれていた。



試食とまとめ！

エビチリソースに春菊の香りが重なり、「パクチーっぽくてタイ料理みたい!」と大盛り上がり。納豆との意外な相性にも驚きつつ、山口さん考案の塩昆布を練り込んだ生地が絶品だと話が弾みました。



みんなで持ち寄ったおやきの具材

ラザニア …「食べたいから入れた!」という自由な発想で選ばれた、挑戦的な洋風具材。

畑の野菜…アッセンブリッジ・ナゴヤのプロジェクトでアーティストの活動の場として活用されている「旧・名古屋税関港寮」の畑で育った小松菜や春菊、ローズマリー。



納豆…ねばりと食感が面白い! 試してみたいくなる、冒険心で選ばれた具材。

エビチリ…間宮さんがどうしても入れてたくて、スーパーを3軒回って見つけたこだわりの逸品。



まちの人が登場

「パーティしてるの?」とご近所さん。アトリエの改修前から見守ってくれていた、まちの日常風景。



顔つきおやき誕生

ちょうど真ん中が焦げて鼻みたい! 可愛くて、食べるのが惜しいと盛り上がりを見せていた。



無難な具材集合

「みんなで食べるし…」と配慮しすぎて、気づけば冒険なしの美味しいラインナップに。



包丁を借りに

包丁を忘れてスタジオの大家さんに借りに行くと、気前よく3本も貸してくれる優しいやりとりが。



完成したおやき



住む人 港まちに

山口麻加さん

版画家。港まちにスタジオを構え、「アッセンブリッジ・ナゴヤ」のスタッフとしても活動中。町内会にも参加し、地域の一員としても大活躍。まちと関わる輪を広げている。



来た人 港まちに

間宮将太さん

映像制作を中心に、制作会社と梱包業を営む。父の工場が港区にあり、幼少期に港まちへ訪れた思い出も。現在は趣味で気になる人を取材・編集し、YouTubeに投稿している。

河部圭佑さん

建築設計を専門とし、山口さんとは金山のアートプロジェクトで出会う。以降、港まちにも縁が生まれ、山口さんのスタジオの改修計画に関わる。大学の非常勤講師として勤務。

港まちのクラブ名鑑

取材・文・写真：東 唯（港まちづくり協議会）

港まちで活動するサークルを訪ねます。今回は、港まちポットラックビルのレンタルスペースを利用されている民踊教室へ。



| クラブ名 | あすなろ会 |
|---------|---|
| 結成 | 1990年8月 |
| 活動場所 | 西築地地区 |
| 現在の部員 | 15名 |
| 結成のきっかけ | 「こんなに踊り好きがいる町なのに、盆踊りだけじゃもったいない!」女性会会長田島さんが各町内から選抜メンバーを募ったのが始まりです。 |
| 活動コンセプト | 港区から名古屋市内のどこへでも。若手育成も担いつつ、地域振興を協力するべく、日々お稽古に励んでおります。 |